広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ポール・エリュアールの散文詩「ともに過ごした夜々」について
Author(s)	佐藤, 巌
Citation	フランス文学 , 12 : 40 - 46
Issue Date	1978-05-20
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040911
Right	
Relation	

ポール・エリュアールの散文詩
「ともに過ごした夜々」について

佐藤　　巌

1. はじめに

1932年の詩集「直接の生」 *La Vie immédiate* に収めるこの散文詩について，Claude Roy はエリュアールの詩選集 *Choix de Poèmes*（1959）の序文の中でこう述べている：『詩人の感情のひとつの歴史をほのめかすように思われる「直接の生」のそれら散文詩は，彼の作品中において真に例外的な性格と特徴をもつ．エリュアールが「存在の不調和と不在の調和について」語り，「ともに過ごした夜々」の中である秘められた愛の物語へのひそかな暗示を繰りひろげるのを聴くと，私たちは驚き面くらう．それはエリュアールの恋愛詩は概して驚嘆すべきほどに反自叙伝的だからである．』と．実際，ここに暗示されているのは詩人とその最初の妻ガラとの愛の物語であるし，それが破局に立ち至った時点からの苦悩にみちた回想の詩的造型である．その点1929年の詩集「愛・詩」 *L'Amour la póesie* や，「直接の生」に併せ収めた「あらゆる試練に耐えて」À toute épreuve の特に「宇宙・孤独」 *L'Univers-Solitude* の部分の一連の詩と，ほぼ以た主題を取り扱っているといえよう．とすれば，詩人とその妻との愛とその破局の詩的表現を綜合的にとらえて分析する作業を考える場合，われわれが今ここで手がけるこの散文詩に限っての分析は，それ自体ひとつの補助的な資料となるべきものとして位置付けられよう．

いまひとつわれわれの追求すべき事柄は，恋愛詩におけるエリュアールの詩法そのものである．この作品中に示されたイマージュ技法の考察，また詩人が時折りほのめかす彼自身の方法論についての言及に関する考察を試みるべきである．小論はしたがってほぼその二点を中心として展開されるであろう．

2. 愛の歴史

「ぼくが若かった頃のように，ぼくはきみの弟子なんだと宣言することがなぜ今もなおできないのか」①（断章4）はスイスのクラヴァデルのサナトリウムで，当時17才の若き詩人が女友達ガラに言った言葉の追憶である．愛の出発点において二人の間には精神的な

一致があった．詩人の母の反対でやや延期されたが，1917年にふたりは結婚する．「存在の不調和と不在の調和とを，不器用ですなおな結合と窮乏の科学とを和解させる」②（同）ことができるとガラは考えていた。若く未熟な二人の結婚とやりくり生活をほのめかすくだりである．「しかしあらゆるものの下に倦怠があったのだ」③（同）と述べ，この倦怠を盲目の鷲に例えるとき，詩人はすでにはぐくまれつつあったひとつの危機を明らかにする．

ところで彼は今，妻の不在の部屋を訪れるが，それは「またぼくは以前きみを見付けようとして出発したあの時代を，そして不可解な世界や，きみがぼくに提案していた支離滅裂な理解のしかたを前にしてぼくが盲であり唖であったあの時代を懐しく思うから」④（断章1）である．二人の初期の精神的一致は，エリュアールの，ガラに対する盲従の形におけるそれであったと，われわれは考えてもよいのであろうか？　「きみの意志をいつもきみに背かせるようにぼくに強いていたあのあどけなさに対する責任を，きみは十分に負わなかったろうか？」⑤（同）における「あどけなさ」は，若い詩人のそれであったのか？　ガラは彼にものを考える余裕も与えなかった．「ぼくらは見物人の立入りを拒んだが，それというのも見世物なんかありはしないからなのだ」⑥（同）の「見世物」spectacle は夫婦喧嘩 scène de ménage を連想させる．それはなかったのだと彼は言うが，そこにはただ孤独の領する空虚な舞台があったのだ．そして二人の長い愛の歴史を通じて，二人を結んでいた絆を，今になって彼は痛感する．「ぼくらがべつべつにたどったあの長い旅の宿場々々で，今にして判るのだが，ぼくらは本当に一緒だったし，ぼくらは本当に，ぼくらは，ぼくらだったからである．」⑦（同）

断章5は愛の破局の苦悩にみちた告白である．「ぼくの承認し得なかった年の，承認し得なかった日が，突然やってきた……しかしその日にはぼくはあまりにも苦しんだ．生活は，愛は，自らの定点を喪失してしまっていた．」⑧（断章5）彼はひたすら妻に対して忠実であったのに。ガラはサルヴァドール・ダリと恋愛し，エリァールとは別れる．この時詩人は怒りや嫉妬を感じたにちがいないが，断章5の末尾で述べているように，要するに愛が貞節に依存するのでなくその逆であるべきだという理解によって，また「あらゆる試練に耐えて」中の「宇宙・孤独」のXIX（妻の不貞をほのめかす詩）の「河は水の国でしか姿を消さない」⑨の1行が示す女性観（個性的存在たるガラが，超現実的・普遍的女性という海に流れこみ姿を消す河の運命をたどったものとみなす）によって，彼はこの事実を受容する．

3. エリュアールの女性観とガラ

「ぼくは自分の愛していない女たちに対して，彼女らの存在はきみの存在に依存しているのだと言ってやった．」⑩（断章4）との叙述は，妻のガラが詩人にとって全女性の代

表者であることを示している．また「街路で，田園で，百人もの女たちがきみに追い散らされ，きみは彼女らを結ぶ類似を引き裂き，百人もの女たちはまたきみによって集められるが，きみは新たな共通の特徴を与えることができないので，彼女らは百もの顔を，きみの美しさを妨げる百もの顔を持っているのだ」⑪（断章４）は，エリュアールの女性観においては全女性は「類似」の絆で結ばれ，彼女らの美しさはガラの美しさをいわば援護し増強すべきものであるのに，ガラは彼女らをライバル視する。といった食い違いが暗示されていると思われる．ガラと別れるとき，エリュアールは全女性と別れを告げるであろうのに．

詩的想像力の中でとらえられたガラと，現実の彼女との接点は，第２の断章の中に示されている：「……きみの名前が幻覚を生じさせるようになっていること，それがもうぼくの口の端に上るだけであって，もろもろの誘惑を持ったその顔が，すこしずつ，現実に，全体的に，ただひとつ現われ出ていることに，ぼくは気付いていなかった．そのときこそぼくはきみの方へ振り向くのであった．」⑫そして第３の，愛の讃歌ともいうべき美しい断章でクローズ・アップされるガラの姿は，愛と詩的想像力との驚嘆すべき一致から生まれている：「ぼくらが一緒にいると，永遠に離れまいとして一緒にいる度毎に，きみの声は，こだまが夕暮の空を満たすように，きみの瞳を満たすのだ．」⑬詩人は深く感動しながら女性美の世界へ下りてゆく．彼はガラそのものの中に女性の本質を見る：「きみは死んだ母石より美しいふたつの石を手に入れるために割られる石のようである」⑭と宝石の分割と研磨になぞらえつつ，個体の死をこえてつねにより美しく甦える女性的機能を指示する詩人は，しかしその言葉をガラ自身に語らせることにより，彼女の存在を現実のガラから解き放ち，理想化する．

「もろもろの季節の刈り束が崩れ落ち，きみは自分の心の底を見せる」⑮という文章も，前の段落で着衣をすべて脱ぎ捨てた彼女が，眠ることによって，さらに日常的意識や個性さえも脱ぎ捨てて，生命の本源としてのその本質を露呈することをほのめかすのではないだろうか？　「衰える炎を利用するのは生命の光であり，砂漠を利用するのは……オアシスである」⑮においても，「衰える炎」は消えかかる意識，「生命の光」は存在の無意識的本質，「砂漠」は現実の生活，「オアシス」は超現実を指すと解することができよう．また「きみの髪は，ぼくたちの隔りを正当化する深淵の中に滑りこむ」⑯のこの深淵も，意識と無意識，現実と超現実とをへだてるそれにほかなるまい．こうしてわれわれは，エリュアールがあくまでも，シュールレアリストの立場から愛と女性を眺めていることを結論しうるのである．

4. 詩法について

第6の断章において詩人は自らの詩法について明らかにしている．「ぼくは恐るべき現実に若干の虚構をあくまでも混入する」⑰というのはほかならぬこの散文詩の制作に関する言及であろうし，以下過去形で語られるさまざまの事柄は，シュールレアリスムの詩人としての活動の回顧である。まず最初に示すのはさまざまの（おそらく想像上の）女性たちに対する関心が常に在ったことである：「人住まぬ家々よ，ぼくはおまえたちの中に，肥えても痩せてもいなくて……ある細部のために，有り得ない程も魅力的な女たちを住まわせた」⑱と彼は告白する．彼の想像力を刺戟し導いた主題として報告されるのはこの女性たちだけであるという事実は注目に値しよう．このことから見ても彼は生来の恋愛詩人たる素質を持っていた，とも言えようか．

次に彼は，オブジエの製作に夢中になったこと，もっとも異常なイマージュに慣れ親しんだことを回顧すると共に，いくつかの実例を示す：「女たちは，彼女らの服のひらいたバストが太陽を表わしているために，もはや寝たままでしか移動しないのだった」⑲における女性と太陽，街路と寝床との結合など．そして彼は理性を攻撃する．（シュールレアリストたちは理性が現実社会において功利主義に，そして既成秩序の保持に奉仕していると考えている．それを攻撃するのは，理性をその隷従から解放し真の人間の幸福に役立てたいためである．）「威張り返って，無関心という自分の首輪をつけた，蟻の頭ほどの燈火である理性……」⑳と，イマージュ表現を用いながら彼は理性を罵倒する．

最後にこの作品の断章2に見られる若干のイマージュ表現に注目したい．「光はしかしながらぼくらの出合いのネガの美しい映像をぼくに与えた」㉑において，個人の識別のできない，異様な美しさをもったネガ（陰画）が，恋人同士のめぐり合いにある普遍性を与えるという事に注目すべきである．それにつづく文章はきわめて難解であるが，「きみ」がまず上記のイマージュの中で個性を失っていることを手がかりとして理解すべきであろう：「ぼくはきみを，その多様さだけがあの名前，いつも同じ，きみの名前を正当化してくれる，いくつかの存在と同一視した．」㉒（「ガラ」（Gala）はもともとニックネームであるが，そのいきさつについて筆者は知らない．しかしそれが何を意味していようと，そのこと自体はここであまり意味がないであろう．）問題は，ガラが前述の非個性化の手続を経て，多様ないくつもの存在との間に同一性を確立するということ，そしてそのことを実現させるのはエリュアールの詩的想像力である，ということである．「ぼくはそれら，ぼくが光いっぱいの中できみを変形していたように，ひとが泉の水をコップに汲んでその形を変えるように，ひとが自分の手をほかの手の中におくことによって変形させるように，ぼくが形を変化させていたそれらの存在に，きみの名前をつけてやりたいと思っていた．」㉓とエリュアールは詳述するが，詩的想像力が取扱う多くの素材に，ガラの名前を付ける

ということであって，ここにイマージュ技法の秘密が明らかにされているのである．そのよい例は次の文章である．

「大地のもろもろの洞窟の中では，結晶化した若干の植物が外出用のパンプスを探していた．」㉔の洞窟は部屋々々である．結晶化した若干の植物はガラである（ここでエリュアールの想像力はきわめて自由にはたらいていて，詩的論理による裏付けさえ必要としていない）．それはパンプスを探すことによって正体を暴露されるが，詩人はイマージュ技法の図解を示そうとしてわざとそうしているのでもあろうか．（そしてこのようなガラのイマージュと，現実のガラとの接点についてはすでに述べた．引用⑫参照）

5. 結　び

以上によって，不十分ながら，エリュアールの恋愛詩について語るとき見過せないこの重要な散文詩について分析をした．その結果として言えることは，まず，自叙伝的性格がこの作品において，他の作品ないし詩集の中におけるよりも著しく顕著であるとはあまり言えないということである．本論第2章に述べた程度のことしか，愛の歴史としては，とらえられなかった．（外部からの伝記的補足がそこでも大きな役割を演じていることを忘れてはならない．）第3章では詩人のシュールレアリストとしての女性観とガラとの関連が追求されたが，ここでは詩的想像力が描き出すガラと，現実のガラとの接点が示されていることが最も興味があった．しかしこのガラの二重性は，詩的想像力がさらにガラの存在の内部へ貫入し，意識と無意識，現実と超現実にまたがるその存在構造を取扱うに及んで，結局ある独自な超現実的女性的存在の中に融合するようである．たとえば1939年の「メデューズたち」Médieuses に見られるような神話的女性は，もとをただせば上記のような作業の積み重ねから生まれ出たものであることが判る．けれどもこの散文詩「ともに過ごした夜々」の中では，そのような神話的超現実的女性は，まだその独立性を獲得していなくて，ガラとの同一性の中にしっかりとつなぎとめられているようだ．第4章ではともかくイマージュ技法の見地からその問題に再度アプローチを試みた．もし紙数が許せばこの長い散文詩全体にわたって個々のイマージュを分析し，そこに含まれる詩的論理を検出することによってそのイマージュを正当化するという作業を行ないたかったのであるが，それには別の機会を見出すべきであろう。けれども大体において，この作品は，いわゆる自動記述による偶然性，恣意性に富む作品では全くなく，かなり綿密な計算に基づくものであるらしいと言える．そのことはまた，プレイヤード版全集の註に，原稿上の採用されなかった若干の異文が示されていることからも判る．（自動記述には異文は有り得ず，削除も訂正もないからである．）　〔以上〕

後記：この原稿は昭和52年11月27日香川大学における日本フランス語フランス文学会中国四国支部研究発表会での口頭発表原稿をもとに全面的に書き直したものである.

注　(Œuvres complètes, I, Gallimard, 1968 を使用.)

① Que ne puis-je encore, comme au temps de ma jeunesse, me déclarer ton disciple, ...

② .....concilier les désaccords de la présence et les harmonies de l'absence, ...

③ Mais, plus bas que tout, il y avait l'ennui.

④ .....car je regrette le temps où j'étais parti à ta découverte et temps aussi où j'étais aveugle et muet devant l'univers incompréhensible et le système d'entente incohérent que tu me proposais.

⑤ N'as-tu pos suffisamment porté la responsabilité de cette candeur qui m'obligeait à toujours retourner tes volontés contre toi ?

⑥ Nous avons refusé de laisser entrer les spectateurs, car il n'y a pas de spectacle.

⑦ ……car aux étapes de ces longs voyages que nous faisions séparément, je le sais maintenant, nous étions vraiment ensemble, nous étions vraiment, nous étions, nous.

⑧ ……il y eut soudain tel jour de telle année que je ne pus accepter……mais ce jour-là j'ai trop souffert. La vie, l'amour avaient perdu leur point de fixation.

⑨ Les fleuves ne se perdent qu'au pays de l'eau.

⑩ J'ai dit à des femmes que je n'aimais pas que leur existence dépendait de la tienne.

⑪ Dans les rues, dans les campagnes, cent femmes sont dispersées par toi, tu déchires la ressemblance qui les lie, cent femmes sont réunies par toi et tu ne peux leur donner de nouveaux traits communs et elles ont cent visages, cent visages qui tiennent ta beauté en échec.

⑫ …… je ne m'apercevais pas que ton nom devenait illusoire, qu'il n'était plus que sur ma bouche et que, peu à peu, le visage des tentations apparaissait réel, entier, seul. C'est alors que je me retournais ves toi.

⑬ Réunis, chaque fois à jamais réunis, ta voix comble tes yeux comme l'écho comble le ciel du soir.

⑭ …… tu es comme une pierre que l'on casse pour avoir deux pierres plus belles que leur mère morte, ……

⑮ Les gerbes des saisons s'écroulent, tu montres le fond de ton cœur. C'est la lumière de la vie qui profite des flammes qui s'abaissent, c'est une oasis qui profite du désert, ……

⑯ …… ta chevelure glisse dans l'abime qui justifie notre éloignement.

⑰ Je m'obstine à mêler des fictions aux redoutables réalités.

⑱ Maisons inhabitées, je vous ai peuplées de femmes exceptionnelles, ni grasses, ni maigres, …… de femmes plus séduisantes que possibles, par un détail.

⑲ …… les femmes ne se déplaçaient plus que couchées, leur corsage ouvert représentant le soleil.

⑳ La raison, la tête haute, son carcan d'indifférence, lanterne à tête de fourmi, ……

㉑ La lumière m'a pourtant donné de belles images des négatifs de nos rencontres.

㉒ Je t'ai identifiée à des êtres dont seule la variété justifiait le nom, toujours le même, le tien, ……

㉓ ……, dont je voulais les nommer, des êtres que je transformais comme je te transformais, en pleine lumière, comme on transforme l'eau d'une source en la prenant dans un verre, comme on transforme sa main en la mettant dans une autre.

㉔ Dans les cavernes terrestres, des plantes cristallisées cherchaient les décolletés de la sortie.

（岡山大学法文学部助教授）